

漢書·後漢書·三國志列傳

920

文學 中國

412

I242
J15

京都大学図書



1820103806

人環・総人図書館

I242
J15



日文 701601763

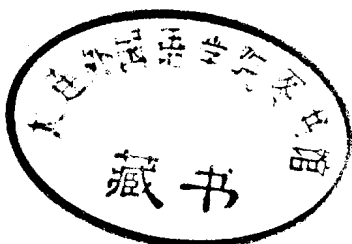
190493

中国古典文学大系 13

平凡社

漢書・後漢書・三国志列伝選

本田濟編訳



京都大学

1990063

図書

412
264

C920

記者紹介

本 田 濟 1920年三重県宇治山田市生。
 京都大学文学部卒。専攻 中国哲学。大
 阪市立大学文学部教授。主著『易学——
 成立と展開』（平楽寺書店）『易』（朝日
 新聞社）現住所 京都市北区紫野上若草
 町14

中国古典文学大系 全60卷

漢書·後漢書·三國志列傳選

第 13 卷

昭和43年6月5日 初版第1刷発行
昭和47年8月20日 初版第3刷発行

定價 1400 円

訳者との申
合せにより
検印を省略
いたします

編 訳 者 本 田 濟

東京都千代田区四番町4番地
下 中 邦 彦

行 所 東京千代田区
 四番町4番地
 振替・東京29639

株式 平 凡 社
 会社

落丁・乱丁本はお取替えいたします
© 株式会社 平凡社 1968

印刷 東洋印刷株式会社
製本 株式会社石津製本所

0398-312131-7600

目次

漢書

李陵·蘇武傳	一五
董仲舒傳	一六
司馬遷傳	一七
武五子傳	一八
嚴助·朱買臣傳	一九
東方朔傳	二〇
公孫·劉·車·王·楊·蔡·陳·鄭傳	二一
楊王孫·胡建·朱雲傳	二二
霍光傳	二三
雋不疑·疏廣·于定國傳	二四
魏相·丙吉傳	二五
趙廣漢·張敞·王尊·王章傳	二六
外戚傳	二七

後漢書

馮異傳	二八
馬援傳	二九
侯霸·宋弘傳	三〇
官秉·張湛·王丹·王良傳	三一
梁冀傳	三二
鄭玄傳	三三
第五倫傳	三四
黨錮傳	三五
郭泰·符融·許劭傳	三六
孔融傳	三七
独行傳	三八
方術傳	三九
逸民傳	四〇
列女傳	四一

三 国 志

魏 書

武帝紀

王粲傳

徐邈·胡質·王昶傳

曹爽傳

蜀 書

諸葛亮傳

簡雍·秦宓傳

關羽·張飛傳

吳 書

周瑜·呂蒙傳

前漢郡國圖

後漢州郡圖·三國鼎立圖

解題

付錄(卷末)

年表

前漢年表

後漢年表

三國年表

前漢職官表

四二七

四二五

一 一 五 八 一〇

漢書・後漢書・三國志列伝選

本

田

濟

訳

凡 例

一、この訳文は、各個人の伝については完訳であり、抄訳でない。

一、原著の体裁を生かし、序・論・賛をも、なるべく訳出する。ただし数人合巻になっているうちの若干名を摘出した場合は、この限りでない。

一、訳文中に二種の括弧「 」（ ）を用いる。「 」（ ）は原文にはないが、日本語として補足の要ある場合の挿入、「 」（ ）は注解である。

一、暦年、地名は原文のまま記し、「 」（ ）で西暦紀年、現在の省名を示す。官名についても大体原文を挙げて注記するが、時として直接言い換える。例えば亭長を関所役人、遊徼を巡査とするなど。

一、上奏文、詔勅などには経書の字句の引用が特に多いが、ナマの形で引かれているもの以外は、煩を避けて一々典拠を示さない。

漢

書

李陵・蘇武伝

李陵は、字を少卿^{せうけい}という。若くして侍中建章監（侍從兼建章宮護衛隊長）となった。騎射の上手で、人を愛し、謙譲で、目下の者にも腰が低いので、甚だ評判がよかった。武帝は、李陵には李広（李陵の祖父で名将）の風があると思ひ、八百騎をひきいて、匈奴の地の奥深く、二千里余りも入らせた（二里は四百メートル）。居延（甘肅省西北境の塞）を過ぎて、地形を偵察したが、敵を見かけなかった。引揚げてから、騎都尉（羽林騎つまり近衛騎兵連隊長）に任せられた。勇敢（特に選抜された精兵部隊）五千人をひきいて、酒泉（甘肅省）・張掖（甘肅省の境）で射法を教えつつ、匈奴に備えていた。

数年して、漢朝は貳師將軍（李広利のこと、彼が貳師城を攻略したのにちなむ）を遣わして大宛（西域諸国の一、フェルガナ）を討たせたが、一方、陵には、五部隊の兵をひきいて、そのあとを追わせた。国境の塞まで行き、貳師將軍に落ち合つて一緒に引き揚げるはずであった。追つて帝から陵に書状が下され、陵は軍官、士卒を留めおき、輕騎兵五百人とともに、敦煌（甘肅省）を出て、塩水（西州高昌縣）まで行き、貳師將軍を迎えて帰り、また張掖に駐屯した。

天漢二年（前九〇）、貳師將軍は三万騎をひきいて酒泉を出、匈奴右賢王（匈奴諸侯の号）を天山（新疆省疏勒西北、葱嶺の一）に討った。帝は陵を召し、貳師將軍のために轡重を引率させようと思つた。陵は召し出されて武台（未央宮の殿）でお目通りした。叩頭してお願いしている、

「私が引き連れて国境を守ります者ども皆、楚国（湖南・湖北）出身の勇士にて、人並みすぐれた剣客ぞろいでございます。力は虎をもとりひしぎ、弓を引いては百発百中。願わくは、私自身一隊の采配に当たりにたく。さすれば、蘭干山（甘肅省鞏昌府）の南にゆき、単于（匈奴の王）の軍勢をこちらへ割かせ、貳師どのの軍にばかり掛からぬよう致させましょう」

帝「さては、そちは人の下につくのが嫌じゃと申すか？ わしはたくさんの軍勢を出しておる。そちにやる騎兵はもうないわ」

陵は答えて、「騎兵などは要りませぬ。それがし、寡勢で多勢を討ちます。歩兵五千人で単于の庭さきをのし歩いてやります」

帝は元氣な奴と思ひ、願いを許した。ついでに、彊弩都尉（彊弩將軍の下位。彊弩將軍は伏波將軍などとともに維希將軍の二の路博德に命じて、兵をひきい、中途まで李陵の軍を迎えに出させた。博德はもとの伏波將軍である。これまた陵の後詰めをするのを恥と思つた。上奏している、

「時はまさに秋。匈奴の馬は肥えておりますれば、うかつに戦つてはなりません。それがし、願わくは李陵を明春まで引き留め、ともどもに酒泉・張掖の騎兵各五千人をひきい、東西の浚稽山（トラ河とオルコン河の間の山、この二山に匈奴がいた）を討てば、必ずや単于をとりこに致せましょう」

この上奏文が差し出されると、帝は怒った。さては、李陵が後悔して、出陣がいやになり、博德に上奏させたか、と疑つたのである。そこで博德に次の詔書を下された、

「わしが李陵に騎兵を与えようと思つたは、あれが寡勢で多勢を討つて見せると申した故じゃ。今、夷は西河（甘肅省平羅縣）に入つておる。いで、兵を引き連れて西河に馳せつけ、鉤營（地名）への道を遮断せ

よ」

陵に下された詔書には、「九月に出発して遮虜障（塞の名、張掖の東北千五百里）に出、東浚稽山の南、竜、勒水のほとりに至って、あたりを徘徊し、敵情を偵察せよ。もし何も見つけ得ぬときは、泥野侯（楼蘭の地の領主）趙破奴の旧道を経て、受降城（綏遠の境）に至り、兵士を休息せしめ、駅馬によって報告せよ。路博徳と談らうたことは、何ごとじゃ（博徳の前の上奏を陵がいわせたと思っている）。委細、書面にて返答せい」

陵はここで歩兵五千人をひきい、居延を出、北の方へ三十日行軍して浚稽山に到着、ここに宿営した。経過した山川の地形を、ことごとく地図にして、麾下の騎兵陳步楽に持たせ、帰って上奏させた。歩楽は召し出されて、李陵の統率ぶりは、士卒が陵のためなら喜んで死ぬというほどであると報告した。帝はご機嫌斜めならず、歩楽を郎（宿衛官）に任命した。

李陵が浚稽山に着くと、单于とぶつかった。敵の騎兵三万ばかりが、陵の軍を取り巻いた。李陵の軍は二つの山の間におる。大きな車を円形にならべて砦とし、陵は兵士を連れて砦の外に出て陣を布く。前列には戟と楯を、後列には弓と弩をもたせ、命令していう、「太鼓の音を聞いたら打って出よ。銅鑼の音を聞いたら止まれ」

敵は漢軍が少勢なのを見て、真っ直ぐに突っかけてきて砦にかかった。陵は白刃をふるってこれを攻める。千挺の弩が一斉に発射され、弦音とともに、敵は倒れた。敵は後退して山に登る。漢軍は追撃して数千人を殺した。单于是大いに驚き、近くの土兵八万騎余りを召集して陵を攻めた。陵は戦いながら後退し、南に下ること数日、山峡の中に入る。戦いはなおつづく。士卒で矢に中たつて三つ創を負うた者は車に乗せ、創二つの者は車を引き、創一つの者は武器を取って戦う。

陵がいう、

「わが軍の士気、少しく衰えて、太鼓を鳴らしても奮い起たぬは、何故じゃ？ ひょっとして、軍中に女子がおるのではないか？」

最初、軍が出立する時、関東の流賊の妻子で辺境に移住させられる者が、軍についてきて、兵士の妻となっていた。それが多勢、車の中に隠れていた。陵は捜し出して、全部、剣で斬り捨てた。

翌日、ふたたび戦い、敵の首級を三千余り取った。兵を引き連れ、東南のほう、もとの竜城（内蒙古の境）への道に沿って行軍する。四、五日歩くと、大きな沼地の蘆や葦の中に入りこんだ。敵は風上から火を放つ。陵も全軍に命じ、まわりの蘆に火をつけさせて、助かった。南に向かつて、山の麓にきた。单于是南の山の上に入っていたが、わが子に命じ、騎兵をひきいて陵を攻めさせた。陵の軍は徒歩になって、樹木の間で戦い（匈奴は歩戦が不得意）、またまた数千人を殺した。ここで連弩（十本の矢を同時につがえるいしゆみ）を放って、单于を射た。单于是山を降りて逃げた。

この日、捕虜にした匈奴がいうには、

「单于さまが申されるには『これは漢のえりぬきの軍勢じゃ。いくら攻撃をかけても参らない。それが毎日每晚、わが軍を引き摺って南へ南へと下つておる。漢の塞に近づけば、待伏せの軍勢がおるのではあるまいか？』と。当戸（匈奴の官名）や酋長たちはそれに対して、『单于さまが自分で数万騎を引き連れて漢の数千人を伐ち、全滅させられぬとあっては、今後、まわりの属国どもがいうことをききませぬし、わが部族は漢にますますあなだられますぞ。いま一度山峡で辛抱して戦い、もう四、五十里も行けば、平地がございましょう（匈奴得意の騎馬戦は平地が有利）。平地で勝てなんだら、そのときは退けばいいのですから』と申しおりました」

この時、李陵の軍はますます危うくなっていた。匈奴の騎兵は多い。それでも李陵は一日に数十回も戦い、また敵二千余人を殺傷した。敵はかなわぬと見て、退こうとする。ちょうどその時、陵の軍侯（大隊長、將軍のひきいる軍は五部からなり、部は校尉が指揮し、部の下に曲があり、曲の指揮は軍侯がとる）管敢が校尉（連隊長）から侮辱されて、逃亡し、匈奴に投降していたのが、くわしく情報を述べた、

「李陵の軍には後方の援軍などございません。矢もほとんど射尽くしております。將軍の旗本と、成安侯の部隊と、おのおの八百人だけが先手になっており、黄と白とを旗印にしております。えりぬきの騎兵にあれを射させたら、打ち負かせます」

右の成安侯とは、潁川（河南省禹県）の人。父の韓千秋はもと濟南王の家老で、南越（広東・広西）征伐に奮戦、討ち死にした。武帝は子の延年を諸侯に封じた。これが今、校尉として李陵に随っているのである。

単于是管敢の情報を得て大いに喜び、騎兵に命じ、一斉に漢軍に突っ込ませた。駆けながら、どなる、

「李陵！ 韓延年！ すみやかに降参しろ」

そのまま道をさえぎって、はげしく陵を攻めた。陵は峡谷の中に入り、敵は山の上にいる。四方から射立てる矢は、雨のように降って来る。漢軍は南に向かったが、まだ靺鞨山（遼東の西北百八十里）に行きつけぬ。一日のうちに五十万本の矢はすべて尽きた。そこで車を棄てて去った。兵士はまだ三千人余りいる。わずかに車輪の輻を切った刀の代わりにし、軍吏は短刀を持ち、靺鞨山にたどりつき、峡谷に入った。単于是後方を遮断し、山の角に登って、砦の壁の石を投げ落とす。陵の士卒の多くは死に、進みもならぬ。

日が暮れたあと、李陵は平服に身をやつし、ただひとり歩いて陣を

出た。左右の者を押し止めていう、

「わしについて来るな。男一匹、ひとりで単于を捕えるまでじゃ」

しばらくたってから、陵は帰ってきたが、ほっと吐息をいう、

「戦は負けじゃ。死のう」

軍吏の或る者がいう、

「將軍のご威光は匈奴を十分慄え上がらせました。ただ天運がついて廻らなかっただけでございます。（一旦降参して）あとで間道を見付けて、真っ直ぐ帰国なされましては？ 浞野侯（趙破奴）どのなどは、敵に捕えられ、あとで逃げ帰りましたれど、天子はお咎めもなく優遇なされました。まして將軍ならば、なおさらでございましょう」

陵「やめい。わしが命を惜しんでは、さむらいとはいわれぬ」

ここですべて、旗差物を切り、大切な物とあわせて地中に埋めた。陵が嘆いているには、

「矢がもう数十本あれば、脱け出せるになあ。今は、も一度戦うにも得物がない。夜が明ければ、みすみす縄目にかかろう。めいめい鳥獣のように散れ。なかには逃げのびて天子にお知らせできる者もあらう」

兵士に、各自二升（一升は〇・一九リットル）の干飯と一かけの水を持たせ、遼東障にたどり着いた者はそこで後続を待つよう約束した。夜半のころに、太鼓を鳴らして兵士を起こそうとしたが、太鼓が鳴らない（不吉な前兆）。陵は韓延年とともに馬に乗る。従う勇士は十余人。敵の騎兵数千があとを追ひ、韓延年は戦死した。陵がいう、

「どの面さげて陛下に言上できようぞ」

そのまま降参した。士卒は散り散りになり、逃げのびて塞に着いたものは四百人余り。陵が敗れた場所は塞から百余里のところであった。

国境の塞が、そのことを奏上した。帝は、李陵が斬り死にしている

くれればよいが、と思ひ、陵の母と妻を召し出し、人相見に見させたところ、身内に死なれた相は見えないという。その後、陵が敵に降参したと聞き、帝は大いに怒った。〔さきに陵をほめた〕陳歩楽を詰問し、歩楽は自殺した。

大臣たちは皆、陵を有罪という。帝は太史令（史官の長）司馬遷に問うたところ、遷は口を極めて弁護した、

「李陵は親に仕えては孝、友人には誠実。常々奮い立って身命を顧みず、国難に殉じようというのが、李陵の平生からの願ひでございました。国士の風がございます。今、事を起こして、一たび不運の仕儀に相成りましたるに、命の危険もなく妻子をのうのうと抱えております者どもが、この時とばかりに有ること無いこと悪口を申しますのは、まことに可哀そうでなりません。それに、陵が引き連れましました歩兵は五千にも満たぬに、深く胡馬の棲む地に踏み入り、数万の大軍に駆け向かいました。敵は死傷者を救けるいとまもなく、弓を引ける民をことごとく繰り出して、一斉に攻め囲みました。李陵の軍、矢は尽き、道はふさがり、兵士は矢もなき弓をしほり、白刃を犯して、北に向かい、われ先にと斬り死に致しました。李陵がかくも家来に命惜しまぬ働きをさせ得ましたは、古えの名将とて及ばぬところ。その身は打ち負けましたるも、衷を打ち破りました手柄は、これまた天下に披露するに足りましょう。彼が死ななかつたのは、おおかた良い機を見つけ、漢に恩返ししようとしてのことでございましょう」

さきに帝が貳師將軍の大軍を派遣した際、李陵にはわずかに援護の働きを命じただけだった。その陵が単于と戈を交えるに及んで、貳師將軍の手柄は取るに足りぬものとなった。帝は、司馬遷はよい加減なことをいう、それも、貳師の功名をぶちこわさんのために、陵のために宣伝しおる、と思ひ、遷を宮刑に処した。

しばらくして、帝は李陵に援軍を出してやらなかったことを後悔して、こういった、

「李陵が塞を出で立つ時になって、始めて彊弩都尉（路博徳）に後詰めを命じて、陵軍を迎えさせればよかったものを！ 出陣前に命じたばかりに、あの老いぼれ（路博徳）に悪だくみをさせてしまった（博徳が後輩の陵の後衛になることを恥じ、上奏した結果、博徳は別に西河へ派遣された）」

そこで使者をやつて、李陵の軍の生き残りを慰勞し褒美を下された。李陵が匈奴のなかに入つて一年余りになる。帝は因杆將軍（雍号將軍の一、因杆は夷の地名）公孫敖を遣わし、兵をひきいて匈奴の地深く侵入させた。李陵を迎えようとしてである。敖の軍は何の功もなく引き揚げた。敖が申し上げるには、

「敵兵を生け捕りましたが、その申し条では、李陵は単于に兵法を教えて、漢軍に備えておりますそうな。さればこそそれがしは、何の手柄も立てられませなんだ」

帝はそれと聞くと、李陵の一族を皆殺しにさせた。母、弟、妻子みな死罪になった。隴西（甘肅省、李陵の故郷）の士大夫は李氏のことを土地の恥とした。

その後、漢は使者を匈奴に派遣した。李陵が使者にいう、

「わしは漢のために歩兵五千人をひきい、匈奴の中を横行した。助勢が無いばかりに打ち負けたのじゃ。わしが漢にいかな咎を犯したというて、わが身内を死罪にされたぞ？」

使者「漢朝にては李少卿（他人をよぶには字でよぶのが普通）どのが匈奴に兵法を教えていられると聞きました故」

陵「あいや、それは李緒のことじゃ。わしではない」

李緒とはもと、漢の塞外都尉（異族鎮撫隊長）で、奚侯城（察哈爾に

ある)にいた。匈奴が城を攻めたおり、李緒は降参したが、单于是これを客分として待遇した。いつも李陵より上座に坐る。李陵は自分の家族が李緒のために死罪になったことを痛ましく思い、人を使って李緒を刺し殺した。大閼氏(单于の母)は李陵を殺そうとする。单于是李陵を北のほうにかくまった。大閼氏が死んで、ようやく立ちもどった。单于是李陵を勇ましい男と思い、娘を娶せ、立てて右校王とした。衛律は丁靈王となった(丁靈は匈奴の別種)。どちらも身分高く、重用されていた。

衛律とは、その父はもと長水(河南省洛寧県、ここに外人部隊が置かれた)にいた胡人である。律は漢で成長した。協律都尉(音楽隊長)の李延年(外戚列伝参照)と仲が善い。延年は衛律を帝に推薦したので、律は匈奴へ使いた。使いから帰って見れば、ちょうど「延年は死罪」延年の一家は官奴として没収という始末。衛律は連坐して死罪になりはせぬかと思ひ、逃げもどって匈奴に降参した。单于是律が気に入る、いつも左右に侍らせた。李陵のほうは、单于の幕舎の外に住んだ。大事があれば、始めて入って相談に与った。

〔武帝がなくなり〕昭帝が立つ(前へ)。大將軍霍光・左將軍上官桀が補佐役となる。二人はもともと李陵と仲が善い。李陵の古なじみ、隴西の任立政ら三人をやつて、李陵を招くべく、匈奴に行かせた。

立政らは到着した。单于是酒盛りして、漢の使者をもてなす。李陵も衛律も列席した。立政らは李陵を見つけたが、私的に話し合うおりが無い。そこで陵に目くばせし、たびたび自分の刀の環(柄頭)を撫で、自分の足を握って見せた。漢へ帰還せよとひそかにさとしたのである(環と還は同音。足を握ったのは逃走せよということ)。

公式の宴のあと、李陵と衛律は、牛肉と酒をさげてきて、漢の使者をねぎらい、博奕をうちながら飲んだ。二人とも左前の胡服を着、さ

い榎もといのような響にゆっている。立政は大声でいった、

「漢朝はすでに大赦令を出され(即位の大典を祝って大赦する)、中国は安楽なものでござる。主上はお年も若く、霍子孟(霍光の字)どの、上官少叔(上官桀の字)どのが取り仕切っておられます」

このことばで李陵の気を引いて見たのである。李陵は黙ったまま答えない。相手の顔をつくづく見て、自分の髪を撫でいう、

「わしはもう胡の身なりになっておる」

律が用足しに立った。立政がいう、

「それやれ、少卿どのにはいたく苦勞なされた。霍子孟どの、上官少叔どの、貴殿によろしゅうとのことでござった」

陵「霍と上官とは達者かな?」

立政「何とぞ少卿どの、ふるさとお帰りのあれ。すれば出世は疑いござらぬに」

陵は立政を字でよんで(打ちとけた態度を示す)いう、

「少公どの。帰るはいと易い。なれど、再度の恥をかかされなば、何とする?」

そのことばがまだ終わらぬうちに、衛律がもどって来た。ことば尻をいくらか聞いてしまった。衛律がいう、

「李少卿どのはいえらいお人じゃ。何も一國にしか身の置きどころがないわけではない。范蠡(越王句踐の謀臣、呉を滅ぼしたあと、浪人した)は天下をあまねく遊びまわり、由余(戎の賢人、秦穆公に仕えた)は故郷の戎を立ち去って秦に入ったわ。最前は何を仲善うに語ろうておられた?」

そこで酒盛りはお開きになった。立政は李陵の後ろに続いて、話しかけた、

「今でも帰る気は?」

「男として二度も恥をかきとうはない」
李陵は匈奴のなかで二十年余り暮らしたが、元平元年（前55）に病死した。

蘇武は、字を子卿^{しけい}という。若年のころ、父任（また父蔭という、父が国に功勞ある場合、その子が官吏になれる）でもって、兄弟ともども郎（宿衛官、役人の試補になる）になった。だんだん出世して、移中廐（宮中のうまやの名）の廐奉行^{けいぎやう}になった。

そのころ、漢は続けさまに夷^{えい}を討ち、たびたび使者を往き来させて、互いに隙を窺^{うかが}っていた。匈奴は漢の使者、郭吉・路充国らを、前後十数人抑留したが、漢のほうでも、その仕返しに匈奴の使者が来る、これを抑留していた。

天漢元年（前100）、且鞮侯^{しよていこう}单于是位に即いたばかりで、漢に襲われることを恐れた。そこで、

「漢の天子は、われらが親爺^{おやぢ}どの同然^{どうぜん}じゃ」

といい、漢の使者路充国らを全部帰してよこした。武帝は殊勝な心ばえだと思い、蘇武を遣わし、中郎将（宿衛官の長、二千石）の資格で、節（勅使のしるしとなる杖）を持たせ、漢に抑留されていた匈奴の使者を送り届けさせるとともに、单于に手厚い礼物を贈り、その好意に答えようとした。

武は、副中郎将の張勝、仮の役人常恵らと、兵士・斥候百余人を募集して、出発した。匈奴に到着すると、引出物をならべて单于に贈った。单于は前にもまして威張りかえっており、漢側の期待したような態度ではない。

今しも匈奴から使者を出して、蘇武らを送り返そうというおりから、緡王と長水の虞常らが、匈奴のなかで謀反をしようとした。

緡王とは昆邪（異族の二）王の姉の子である。昆邪王とともに漢に降参し、後、浞野侯趙破奴のともをして（匈奴を討ったが敗れて）匈奴に捕えられた。これが、衛律が引き連れて匈奴に投降した虞常と陰謀をたてた。单于の母閼氏^{かんてい}を脅迫して漢に帰参しようというのである。そこへ蘇武らが匈奴にやってきた。虞常は漢にいたころ、ずっと副使の張勝と知り合いであった。こっそり勝をたずねていう、

「聞けば、漢の天子さまには、いたく衛律を怨んでおらるる由。それがし、漢のために、弩を隠し持ち、衛律めを射殺してのけましよう。それがしの母と弟が漢におります。律を殺したご褒美をそれにやって頂ければ幸甚でござります」

張勝は承知し、持参の金品を虞常に与えた。

後、一月余りして、单于是獵に出た。閼氏の子弟だけが残っている。虞常ら七十余人はかねての手筈に取りかかる。その一人が夜中に逃亡し、密告した。单于の子弟は兵士を繰り出して迎え撃つ。緡王らは皆殺され、虞常は生け捕りになった。单于是衛律に事件を取り調べさせる。張勝はそれと聞くと、前の虞常との話が明るみに出せぬかと心配になり、一部始終を蘇武に打ち明けた。武がいう、

「さような仕儀であったか。かくてはわしもかかりあいになるは必定。縄目の恥にかかってから死んだのでは、重ね重ねお国に迷惑をかける」

自殺しようとする。勝・恵らがともども押し止めた。

果たして虞常は張勝を巻き添えにした。单于是怒り、貴人たちを召集して、漢の使者を殺そうと相談した。左尹秩^{さいんし}嘗（匈奴の王号の二）がいうに、

「衛律を殺そうと謀っただけで死罪にするとならば」もし单于さまを殺そうと謀った場合、それ以上いかな罰を加えられましようぞ。皆

の者の命だけはお助けあったがようございましょう」

单于是衛律を代理に遣わして、蘇武をよび出し、訊問に答えさせた。蘇武は常恵らに向かつていう、

「臣としての操を曲げ、君命を辱しめては、たとい生き延びるとも、何の面目あつて漢に帰れよう」

佩刀を抜くなり、おのが胸に刺す。衛律は驚いて、自身で蘇武を抱きとめ、急ぎ医者をやんだ。地面を掘って穴をあけたなかに、煖火をいけ、蘇武を穴の上につぶせにし、その背中を踏んで鬱血を出させた。蘇武は息も絶えていたが、半日で息を吹きかえした。常恵らは泣きながら輿に乗せて陣屋に帰った。

单于是蘇武の氣節を天晴れに思い、朝夕人をやうて蘇武を見舞わせる一方、張勝を投獄した。蘇武はだんだん快くなつた。单于是使いをやつて蘇武を説得した。ちやうど虞常の裁きをつける段になつたが、これをし、おに蘇武を降参させようというつもりである。虞常を劍で斬つたあと、衛律がいうには、

「漢の使者張勝は、单于の近臣（自分のこと）を殺さんと謀つたかどにて、死罪申し付くる。ただし单于におかれては、降参を申し出る者あらば、罪を赦そうとの仰せじや」

劍をふり上げて張勝を斬ろうとする。勝は降参したいという。律は蘇武に向かつていう、

「副使が罪を犯した上は、そのほうも同罪であるぞ」

武「もともと相談には与り申さぬ。しかも親族でもない。何故に同罪といわるる？」

衛律は再度劍をあげて突きつける。蘇武は動じない。律がいう、

「蘇君！ わしはさきに漢にそむいて匈奴に身を寄せたが、幸いに大恩を蒙り、号を賜わつて王とよばれておる。かかえる民は数万、飼ひ

馬などは山に満ちておる。それほどの身分じや。蘇君も、今日降参なされば、明日は同様の身分になられよう。あだに身を草原のこやしとなさつても、だれが知つてくれよう？」

蘇武は答えない。衛律はさらにいった、

「君がわしをなかに降参なされば、わしと君とは兄弟じや。今、わしのいうことを聞かれねば、あとでもう一度わしに会いたいと思ひでも、かないませぬぞ」

蘇武は衛律を罵つていう、

「きさまは人の臣、人の子でありながら、恩義を思ひで、主にそむき親にそむき、野蠻人に降参した。何できさまに会う用やある？ それに单于是きさまを信ずればこそ、人を活かすか殺すかを委せられたに、平心に正しい裁きをつけようとせぬのみか、かえつて双方の君主を戦わせ、災難が起こるのを、高見の見物する気でおる。南越は漢の使者を殺したばかりに、滅ぼされて九つの郡になつた。宛王（大宛の王）は漢の使者を殺したため、首を北の城門に梟された。朝鮮は漢の使者を殺した故に、すぐと誅滅された。匈奴だけはまださような仕儀に立ち至らずにおる。きさまはわしが降参する気のないこと、とくと承知の上にて、〔漢の使者たるわしを殺して〕漢と匈奴と合戦させようぞ致しおる。匈奴の災難は、わしから始まるであらうぞ」

衛律は蘇武がどうしても脅しに乘らぬと見て、单于に申し上げる。

单于はいよいよますます蘇武を降参させたいと思う。そこで武を大きな穴蔵の中に幽閉しておき、全く飲食物を与えずにおいた。

雪が降ってきた。武は寝たまま、雪をかじり、毛氈の毛と一緒に飲みこむ。数日たつても死なない。匈奴はただ人でないと思ひ、武を北海（バイカル湖）のほとり、人なきところに移し、牡羊を飼わせた。牡羊が仔を産んだら、帰してやろうという。郷下の常恵らは別々にし

て、おのおのよそに置いた。

蘇武は北海のほとりに着いた。食糧を届けてくれる者もない。野鼠を掘り、草の実を貯蔵して食べる。漢の節（使者の杖）を杖について羊を飼ひ、寝ても覚めても放さない。節についていた水牛の尾はすっかり落ちてしまった。

かくて五、六年。单于の弟の於軒王が北海のほとりで弋（いさみ）を狩りをした。蘇武は網をあんたり、弋に使う織（お）を紡いだり、弓や弩を矯め直す術を心得ていた。於軒王は蘇武を可愛がり、衣食を与えてくれた。三年余りして、於軒王は病んだ。蘇武に馬などの家畜・璽・天幕を下された。王が死ぬと、供の者も引越して行つた。その冬、丁靈の民が蘇武の牛や羊を盗んだので、蘇武はまたまた困窮した。

当初、蘇武は李陵とともに侍中になっていた。蘇武が匈奴に使いしで、その翌年に李陵が匈奴に降参したのだが、李陵は恥じて蘇武を尋

ねて来ようとはしなかった。しばらくしてから、单于是李陵を北海のほとりに遣わし、蘇武のために酒宴を開き音楽を奏でさせた。それをし、おに李陵が蘇武にいうよう、

「单于さまには、わしが子卿（武の字）どのと昵懇（じつこん）であつたと聞かれたもので、わしにそなたを説き伏せるようとの仰せ。单于さまには隔意無うそなたをもてなすおつもりじゃ。そなた、どうせ漢に帰ることは相かなわず、あだに人なき土地で身を苦しめても、その忠義、だれが見知ってくれよう？ 以前、そなたの兄者の長君（嘉の字）どのには、帝のお供をして雍（陝西省鳳翔県）の械陽宮に参つたおり、お車を支えながら、ご門内の石畳を降りる際、柱に突き当たり、轡（お）を折つたで、大不敬の罪に問われ、剣で自害なされた。錢二百万を下げ渡され、それで葬いを出された。弟御の孺卿（賁の字）どのには、帝が河東・山西省の后土（大地の神）の祭に行かれるお供をしたおり、騎馬の宦官が黄門駟馬（天子のそえ馬を司る宦官）と船を取り合い、駟馬を河中に押し落として溺れ死にさせ、下手人は逃げた。勅命で孺卿どのが召し捕りに行かれたが、つかまらず、恐れ入って毒を飲んで果てられた。わしがこちらへ来るおり、そなたの母君はすでに身没（まゐ）られて、わしも陽陵（陝西省咸陽県）まで野辺送りさせて頂いた。子卿どのの嫁御はまだお若かったが、聞けばもう再嫁されたとのこと。妹御が二人、娘御が二人、男の御子が一人だけ残っておられたが、それも今ではもう十年あまり、生死のほども知れがたい。人の命は朝露のようなもの。何でかように久しゅう自分から苦勞なさるる？」

蘇武牧羊図（明の張璠 筆）



わしも、降参して間もないころは、ぼんやりとし